

歯科口腔外科処置のための小児全身麻酔による周術期呼吸器合併症についての検討

全, 奈穂

<https://doi.org/10.15017/1500635>

出版情報：九州大学，2014，博士（歯学），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済



氏 名	全 奈穂			
論 文 名	歯科口腔外科処置のための小児全身麻酔による周術期呼吸器合併症についての検討			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	野中 和明
	副 査	九州大学	教授	中村 誠司
	副 査	九州大学	教授	森 悦秀

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

全身麻酔下で手術を施行する場合、術前に上気道感染症（upper respiratory infection: URI）を伴う小児症例では全身麻酔の可否判断に迷うことがある。URI を伴う場合には周術期呼吸器合併症（perioperative respiratory adverse effects: PRAE）の頻度が高まるうえ、小児は成人に比較して重篤化しやすい。安全な麻酔管理のためにも術前の状態評価や合併症の予測は不可欠である。

本研究では、小児を対象とした全身麻酔における PRAE の背景から、全身麻酔の可否判断の基準になる URI の留意点を後ろ向きに検討した。2008 年 1 月から 2012 年 10 月までを対象期間とし、15 歳以下の歯科麻酔管理症例について予定全身麻酔の中止症例の背景を検討した。患者情報は電子カルテおよび麻酔自動記録から抽出した。期間内に 427 症例の全身麻酔を計画したが、6 症例が中止され、54 症例が延期された。そのうち体調不良が原因の 51 症例を年齢層、延期の季節で検討した。1-2 歳で有意に延期頻度が多かったが、季節の影響は認めないことが示された。

さらに、2009 年 9 月から 2012 年 10 月までの 10 歳以下の麻酔時間が 6 時間を越えなかった全身麻酔症例 591 例を対象とし、PRAE 発症の危険因子を検討した。その結果、有意差を認める項目は、鼻水の有無(オッズ比 4.65 P=0.001 95%CI 0.89-1.42)、咳の有無(オッズ比 7.56 P=0.002 95%CI 2.14-26.78)、白血球の増加(オッズ比 6.05 P<0.001 95%CI 3.19-11.46)、2 週間以内の風邪の既往(オッズ比 37.09 P=0.001 95%CI 4.34-317.09)であることが明らかになった。術前にこれら症状を特に複数認めるものでは高率に PRAE の発症が高くなることが認められた。

本研究により、特に 1-2 歳の低年齢児でのリスクが高いこと、また風邪スコアに基づく評価が PRAE に関連することを明らかにした。今回得られた知見は小児症例における全身麻酔の可否判断に非常に有用であり、麻酔管理を必要とする小児の歯科臨床における更なる安全性向上と円滑な運営に寄与できるものであり、本論文は九州大学大学院歯学府において博士（歯学）の学位授与に値するものと判断した。